

県内首長インタビュー④6

桶川市 小野 克典 市長 (47歳)



桶川市に生まれ育った若きリーダー小野市長と「べに花」をモチーフにしたキャラクター「オケちゃん」

■文化と歴史、べに花のふるさと 桶川

江戸時代は中山道の日本橋から約10里、第6番目の宿場町として栄え、今もその面影を残す桶川市は、昨年(2015年(平成27))の11月に市制45周年を迎えました。

「桶川宿」は、近隣で生産された麦やさつまいもなどの農作物の集散地としても繁栄しました。なかでも桶川郷一帯で栽培されていた「べに花」は、山形県の最上紅花に次いで全国第2位の生産量を誇り、「桶川臙脂」の名で広く知られていました。明治期に入ると化学染料が主流になり、べに花の生産は衰退の一途を辿りましたが、桶川市ではべに花を通じて、歴史と伝統を見つめ直し、染料や食用としてのべに花の魅力や価値を見直そうと、市民の手によって再び注目を集めるようになり、市民の手によって再び注目を集めるようになりました。

べに花を現代に生かすことをコンセプトに、1996年(平成8)からべに花の鑑賞期間の毎年6月中旬に「べに花まつり」を開催しています。市では「べに花の郷桶川市」のキャッチフレーズを掲げ、べに花をまちづくりのシンボルとしています。



6月になると市内各地で鮮やかな橙黄色のべに花を見ることが出来ます。市内の古民家を再生した趣のある「べに花ふるさと館」は、食事処や休憩所も備えた市民の憩いの場となっています。

■交通結節点として飛躍

2015年は、JR上野東京ラインの開通や、圏央道 桶川北本IC～白岡菖蒲IC間が開通し、圏央道の県内区間が開通するなど、桶川市にとって記念すべき年となりました。県内圏央道区最後のオープンとなった桶川加納ICを含め、市内には2つのICが設置され、さらに新大宮バイパス宮前ICから圏央道の桶川北本ICまでを結ぶ区間の国道17号の上尾道路が開通しました。

市では、IC周辺の田園環境と調和した産業基盤づくりを推進中ですが、農業振興地域内の大規模な農地転用には多くの制限や調整を要するため、関係機関と協議を重ねながら、製造業や流通業などの企業誘致を実現し、交通結節点としてさらなる飛躍を目指していきます。

県のほぼ中央部に位置する桶川市は、圏央道の開通により広域交通網の結節点となり、強固な地盤の大宮台地という立地特性を活かした首都圏災害時の後方支援拠点としての役割が期待されています。

圏央道の開通を見据え、市では2年前に「道の駅推進課」(本年度より「道の駅・飛行学校跡地整備課」に変更)を設置し、「道の駅 おけがわ」の実現に取り組んでいます。

道の駅の従来のコンセプトである「休憩施設・情報発信機能・地域連携機能」と併せて、埼玉県防災航空隊などの周辺防災関連施設と連携し、太陽光自家発電施設や防災かまど、防災トイレなど、高い防災機能を備えた「防災時の後方支援拠点」となる道の駅の実現を目指しています。



圏央道の県内区間の開通により、利便性がますます向上した桶川市では、IC周辺の田園環境と調和した産業基盤づくりを推進中です。

■大型書店と併設した知の文化・交流拠点が完成

昨年10月に桶川駅前商業ビルの3階に桶川駅西口図書館がリニューアルオープンし、市制45周年と相まって連日多くのメディアで紹介されました。新図書館のフロア面積は、約2.5倍の1,511㎡に拡大、閲覧席は約3倍の115席に増やし、蔵書も約3万冊増えて約9万冊に増冊となりました。

メディアで紹介されたのは、単に規模が大きくなっただけでなく、図書館の隣に約50万冊を取り扱い、1,252㎡のフロア面積を持つ地域最大級の大型書店が新店し、同じフロアに図書館と書店が隣接するという、全国でも珍しい取り組みが大きな反響を呼んだためでした。

図書館と書店を結ぶ共有空間には、企画展示スペースやイベントスペースが設けられ、カフェも営業しています。共有空間では、土日を中心に地元の大学やサークルなどのワークショップやコンサートなどが開催され、知の交流が生まれています。フロア全体を「OKEGAWA honプラス+」と名付けたこの新しい取り組みは、新たな文化・交流拠点として市内外から大きな注目を集めています。

■みんなでつくり 育む交流拠点都市を目指す

桶川市に生まれ育った小野克典市長は、市議と県議をそれぞれ2期務めた後、3年前の市長選に立候補し初当選を果たしました。元気で活力ある持続可能なまちづくりを目指して、「桶川市を元気にする5つの誓いと44の宣言」を掲げ、就任当初から現場に赴き多くの声を聴きながら、交通の要衝としての桶川市の利便性を最大限に生かしたまちづくり事業を推進しています。任期一期目を締めくく

桶川市の概要

人口(H28年1月1日 一住民基本台帳一)	75,071人
世帯数(同上)	31,036世帯
平均年齢(H28年埼玉県(丁)字別人口調査)	46.5歳
生産年齢人口比率(同上)	60.8%
面積(H26年全国都道府県市町村別面積調)	25.35km ²
名目市内総生産(H25年度市町村経済計算)	1,909億8,800万円
製造品出荷額等(H26年工業統計)	1,153億5,937万円
事業所数(H26年経済センサス)	2,330事業所



官民協働による「OKEGAWA honプラス+」。イベントが開催される週末だけでなく、仕事や学校、買い物帰りに気軽に立ち寄れる市民の交流の場となっています。



る本年度は、「桶川市第五次振興計画後期基本計画」のスタートの年でもあり、また、今までに経験のない複数の大規模プロジェクトも継続的に推進する重要な年度でもあります。

懸案であった老朽化が進んだ市庁舎の建替えは、中山道桶川宿の旅籠をイメージし、限られたスペースを効果的に活用した「兼ねる」庁舎をコンセプトと2018年(平成30)に開庁予定です。新庁舎には、災害時の対策本部としての機能を持たせ、免震構造を備える一方、駅からの通りに面する「市民ゾーン」は一部を木造建築にするなど、周辺環境にも配慮した庁舎となる予定です。

市庁舎と同様に、長年の課題である駅東口の整備についても地域住民と協議しながら用地取得を進めています。駅前広場を整備し、エレベータ設置やバリアフリー化など、市の玄関である桶川駅の利便性を向上させるために、県と協力して事業の促進を図っていく予定です。さらに、旧陸軍飛行学校の木造校舎群が現存する希少性の高い遺構である「旧熊谷陸軍飛行学校桶川分教場」の整備を推進し、今後の活用につなげる予定です。太平洋戦争時、特別操縦見習士官などの訓練学校であったこの建物は、歴史的価値が高く、この貴重な遺構を整備し保存することで、平和を考える拠点として、また、観光の拠点としても、桶川の魅力につながると考えています。

交通の整備や大型プロジェクトが次々と推進される中で市長に就任した小野市長は、その責務を痛感しつつ、桶川市の将来像「みんなでつくり 育む 活気あふれる交流都市」実現に向けて、職員、そして桶川市民一丸となって取り組んでいます。